

土曜講座会員制スタート

「どうようメールリスト」にも 是非、ご参加ください！

2002年からいよいよ土曜講座の会員制がスタートしました。年間2万円(レイチェル会員)をはじめとする決して安価ではない会費を設定したことに、スタッフ一同は内心「購読者が減ってしまうのではないかと案じていたのですが、蓋を開けてみる、なんと100名を越す方々が会員となってくださいました。1月末日時点で、

レイチェル会員.....11名
ファール会員.....9名
スカラベ会員.....25名
ダーウィン会員.....44名
ガラパゴス会員.....30名

合計119名の方々でのスタートとなります。

なお、『どうよう便り』のあと数号分の購読料が残っていてまだ会員登録を済ませていただけていない方が11名いらっしゃいますが、その方々には今回専用の郵便振替用紙を同封させていただきましたので、よろしければ登録の手続きをお願い申し上げます。

今回から、レイチェル、ファール、スカラベの各会員の方々への研究発表会のレジュメの同封・郵送が始まります。1月26日の「素人のための疫学入門」(上田昌文+小牧史枝)はなかなか中身の濃い発表でしたが、その様子はレジュメからも伝わってきますでしょうか？今後も充実した研究発表を続々とこなして予定ですので、ご期待ください。なお、レジュメのみ単独で入手を希望される場合は、上田までお問い合わせください。

会員の皆さんで電子メールをお使いになる方々には、是非「どうようメールリスト」にご加入いただければと願っております。毎日数通のメールによって、役に立つ情報、意見の交換、いろいろな出来事の紹介、「どうよう商品」のお知らせなど、多彩なやりとりがなされています。会員の皆さんは、どなたでもすぐに加入できます。

加入する方法は、じつに簡単です。400字から1000字程度の「自己紹介」を上田(uedaki@terra.dti.ne.jp)まで送信してください。それが届いたその日に登録を済ませますので、即日「どうようメールリスト」のメールが皆さんの元に届くようになります。

現在加入者は30名。より多くの方々はこの楽しい「会話の場」に加わっていただけることを願っています。

プロジェクト報告

科学館プロジェクト

今年の課題は2つ

科学館での実践と評価軸の確立

科学館プロジェクトリーダー 古田ゆかり

科学館プロジェクト2年目です。昨年は、3月の山梨合宿にはじまり、5月合宿での琵琶湖博物館訪問、夏の箱根合宿での生命の星・地球博物館のほか、プロジェクトメンバーによる各ミュージアム訪問のレポートがいくつか蓄積されてきました。とは言っても十分な蓄積や、それについての議論が尽くされたわけではなく、思うように勉強会等が実施できなかったこともあり、今年は昨年来の課題、そして今年こそ実現すべき課題をぜひ形にしたいと思います。

今年の科学館プロジェクトの課題は大きく分けて2本です。

1. 科学館との協同による、オリジナルプログラムの実践

2. 私たちの科学館評価軸の確立

1. のオリジナルプログラムは、私たちが考える科学館のあり方を示せるものでなければなりません。一方で、何本かのプログラムを蓄積し、今年の末には科学館プロジェクトのメンバー全員が、ひとつはどんな場所でもプレゼンテーションできる、といったレベルを目指します。開発、パートナーとなる科学館との交渉、資金調達などのスキルまで含め、土曜講座全体の今後の活動の布石となるものだと考えます。

2. は私たちが考える科学館のあり方を明文化する作業でもあり、かつこれをもとにして、新たなパートナーとの協同の可能性、評価そのものを世に問うことにもつながる重要な作業です。博物館評価は、最近ミュージアム関係者の中でもホットな話題ですが、昨年来からプロジェクト内で話している評価軸とは少し趣が違います。独自の評価軸の作成は、プロジェクトの来年の活動にも大きく影響するものですから、昨年5月に提出した原案をまずはたたき台にして議論を進めていきたいと思っています。評価軸作成は2003年3月を目指します。

ここで、科学館プロジェクトが目指す科学館のありかたを今一度整理して、今年の活動の具体的な一歩を踏み出しましょう。

《私たちが考える科学館とは》

【専門家の市民には.....?】

説明された原理・原則を学ぶだけではなく、Up to Dateな科学・技術にふれる

身近な科学の疑問を解決する相談・学習の広場

役立つ・楽しい…… 大人にも有益な施設

【専門家の市民には……？】

「一般の」センスにふれる。研究を社会の中で相対化することができる。

科学に対する期待に広くこたえるスピリッツ

【科学館の当事者には……？】

内部の潜在的エネルギーを引き出し、のびのびとした活動を支援

科学館や他の施設・研究機関とのネットワークの形成
情報の階層化により、より深い科学情報の扱いを可能にする 得意分野の構築

これらを総合すると、人を介した交流が日常的に展開される「本当のハコモノ」としての科学館ということになるでしょうか。

プロジェクト報告 科学技術総合学習プロジェクト
2002年のスタートにあたり
科学技術総合学習プロジェクトリーダー 小寺昭彦

2002年。いよいよ新体制の土曜講座がスタートをきる。と同時に、4月からは総合的な学習の時間（以下「総合学習」と略す）のスタートでもある。昨今私は、学校教育に関わるが増えてきて、決して順調とはいえないながらも緊張感が高まっていく現場の気配を感じている。この様に先生方はもちろんのこと、総合学習に関わる多くの人の期待と不安が入り交じる中、本プロジェクトをどう進めていくべきかについては悩み多き年の初めとなった。

総合学習プロジェクトについては、一昨年の暮れの「21世紀の土曜講座を語る会」において、学校現場で科学技術社会教育に取り組みたいとの思いを持つ人間が盛り上がり、上半期に一気に走り出したプロジェクトである。プロジェクトの最終的な目標は、総合学習の時間に「先生が」使える科学技術社会教育のプログラムを、土曜講座が提供することであった。そこで一月より営業活動とプログラムづくりについて、前例のない試行錯誤を繰り返しながら四月に研究発表を行った。さらに一般を対象にテストを繰り返してきたところで壁にぶつかった。昨年の八月頃のことである。もっとも大きな問題は、私たち土曜講座の取り組んできたプログラムと、総合学習の授業という場に二つの点で大きく乖離があるということが顕現化してきたのだ。

一つめは、これまでの土曜講座のプログラムが広く市民全般を対象とするよりは、どちらかといえば関心がある人と一緒に研究をしようという中で進められてきたこ

とである。この点は本質的には素晴らしいことであるが、こと学校教育の場などで、いわば義務として授業に取り組む子ども（具体的には高校生以下であるが）を対象にするにあたっては、そのノウハウは十分ではなかった。もちろん一般向けの講演を数多くこなしてきた上田氏や優れたワークショップをつくる経験をもつ小林氏のスキルにより、これを修整することは決して不可能なことではない。しかし、それには十分に時間が必要である。この点に関しては、私たちがこれまでつくってきたプログラムが、多くは大人向けであったという点が更に問題を大きくしている。関心のない子どもに対して何らかの「気づき」を与えるプログラムの創出には、労力と時間と経験をつぎ込まねばならないと言うのが、昨年一年の正直な感想ではないだろうか。

もう一つのポイントは、総合教育の場、つまり相手中心である学校の授業に入っていくことの難しさである。これについては、一年かけてかなりその状況を理解したが、決して本質的な問題ではないだろうし、環境は好転しつつある。しかし、やはり時間をかけて実績とコミュニケーションを積み重ねて行くことは必要であろう。

ざっくばらんにいって、何とか今年四月の総合学習スタートに間に合わせようと力んでみたが、そんなに甘いモノではなかったといえれば良いだろうか？

そこで2002年。これからどうするのかである。一言で言えば、焦らず着実に進めようということである。最終的にめざすモノに対してのルートと階段をいくつか設定して、少しずつ成果を出していくこととしたい。まず、一つめのルートが関心を持つ子供に対する働きかけである。これに関しては、すでに上田氏が昨年「レガス」（新宿区主催の子供科学教室での電磁波の授業）などで精力的に取り組んでいるし、理科大の「サイエンス夢工房」（大学祭での科学実験ブース）もそうした場の一つであったらう。ぜひ、このような「場」をさがして、経験を蓄積していきたい。二つめのルートは、多くの人に働きかけるプログラムの検討である。昨年、小林氏がつくった「ワークショップ：21世紀の予言」（20世紀の科学技術の進歩を振り返り、科学技術社会の未来像を考えるワークショップ）のような、面白いプログラムをいくつか増やしていきたい。そして三つめのルートは、メンバーあるいはサポーターの補強である。昨年は当初のメンバー四名のまま、一年間を走り息切れした感がある。二つめまでのルートを通じて、このプロジェクトに関心を持つ人のネットワークを強化していくことが大事であろう。

具体的な動きのひとつには、科学館プロジェクトのプ